

---

# 数学研究会

風唄 沙耶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

数学研究会

### 【Nコード】

N7281W

### 【作者名】

風唄 沙耶

### 【あらすじ】

男子校に女子が特別編入！ 何のゲームだよと言われそうな展開だけど、やっぱり彼女は変わっていた！

異常なほどの美人なのか？ それとも超能力者？ いやいや、それとも彼女は異世界から来た……？

いいえ、彼女はただの数学マニアだったのです。

(前書き)

数学を愛するすべての方へ。

数学を好きになりたいすべての方へ。

数学が苦手なすべての方へ。

美しく神秘的な数学の世界を、少しでも感じていただければ幸いです。

数学が好きだ。

そう言うのと、大抵の人間は驚く。驚いて聞く。「本当に？」と。

逆に僕は聞き返す。「嫌いなのか？」と。

そう言うのと、大抵の人間はすぐにうなずく。うなずいて言う。「もちろん」と。

+++

「起きろ！」

そんな声と共に、丸めたテキストが僕の頭で、パソコンといい音を立てた。……痛い。

起きろということは、僕は寝ていたのか。僕は目をしばたかせ、机に突っ伏したまま腕時計を見る。

朝の8時20分。高校に入学してからの長い付き合いの割に、デジタル時計にはまだ傷1つ付いていない。

心地よい眠りを中断された僕は、思わずまた眠りの渦に巻き込まれそうになる。

「昨日は何時まで起きてた！」

「あー……いや、寝てないです」

すっかり敬語だったはずなのに、僕の答えに教室は爆笑の渦に包まれる。びっくりして顔を上げると、みんな僕を見て爆笑していた。

「え？」

「ほら、騙された！モノマネの篠塚をナメんなよ！」

「……………」

僕は頭を2、3度振って目を覚ます。眠っていた脳細胞が活動を始めた。

ここは教室。今はHR前。窓の外に見えるのは、花がところどころの枝にしがみついている程度の桜の木。朝まで本を読んでいた僕は、クラスのムードメーカー・篠塚にテキストで叩かれて

「篠塚ー！」

「そんなに怒るなって！」

僕は笑いながら立ち上がり、篠塚を追いかけた。丁度いい眠気覚ましだ。

走りながら、学ランのボタンをいくつか開ける。校則違反だけど、構うもんか。

坊主頭からわかるが、篠塚は野球部のピッチャーだ。

そして僕は、数学が好きで仕方ない、いわゆる帰宅部。

足で勝てる確率は0に限りなく近い。近似値。『0』とでも表すか……。

しばらくして、勝てるはずもない鬼ごっこは5分ほどで終わりを告げた。鳴り響くチャイム。なんとなく漂う残念そうな空気。

僕は再び学ランをきっちり着込み、机に置いておいたメガネをかける……篠塚のテキストが置きっぱなしだ。

「篠塚ー……」

本人に返そうと振り向いた僕に、まっすぐに飛んてくるガムテープボール。大きさは野球ボールくらいだろうか。どちらにしても大した速度ではなかったから、軽くかわす。

「きゃっ！？」

僕がかわしたボールはドアの外に飛んでいき、可愛らしい声を発して床に落ちた。……いや、そんなわけがあるか。声を発したのは

ボールじゃなくて　女子だ。

「2年5組って、ここですか？」

セミロングの髪。大きな目。小柄な身体を白と紺のセーラー服に包んでいる。

……そのとき僕は、いや僕たち全員が、パニックに陥っていた。僕たちが今いるここK高は、コアSSH指定校であると同時に、男子校だ。当然クラスには、学年には、学校には、男子しかない。

「君……。いや、あの、あなたは？」

「あ、わたし杏里っていいいます」

綺麗に結ばれた紺色のタイが、艶やかに光っている。上向きのまつげと、ピンク色の唇が『女の子』を感じさせる。テレビでよく見るアイドルに、どこことなく似てる気もする。

おい、杏里くん。そう言いながら、森川先生が机と椅子を抱えてやってきた。

「あ、ここですよね？　2年5組って」

「そうそう。……あ、きみ」

「はい？」

森川先生は、僕らの担任だ。変わった先生が多いK高で、また一段と変わった先生で、僕の所属する数学研究会の顧問だったりする。ニコニコする杏里と僕を見比べたあと、先生は僕の耳元に口を寄せて言った。

「杏里くん、きみとこれから長い付き合いになるかも」

「は？」

聞き返すも、答えは与えられなかった。にっこりと微笑む杏里さんに、僕は曖昧に微笑み返してから教室に入る。

「転校生を紹介します。N県と同じくSSH指定校から来た、杏里くん」

「杏里です。よろしくお願いします」

「みなさんも知っている通り、ここは男子校です」  
森川先生がいつになく真剣な顔で言うから、僕らも思わず真剣な表情になって聞いた。

「しかし彼女は家の方の都合で転勤になったとはいえ、どうしてもSSH指定校で学びたいという希望で、特別に編入しました。

K高の編入試験は、知っていると思うが簡単じゃありません」

またものすごい理由だ。SSH指定校でなければいけない理由でもあるんだろうか。そう思いながら、1番前の席の僕は杏里さんを見た。

「彼女がSSH指定校で学ぶことを希望した理由は」

と、そこで言葉を切る先生。「あなたが言うべきですね」と言わんばかりに、後ろへ一歩後退。

杏里さんが、ぺこりと礼をする。

「はじめまして。杏里です。好きなものは数学です」

ハキハキとした、綺麗なよく通る声。アルトかソプラノか、微妙な高さだな。

……と、落ち着いて考えられたのは、その自己紹介からしばらく経ってから。僕はそれより前に、彼女の発言が気になった。

『好きなものは数学です』

数学が好き。『得意』じゃなくて『好き』。僕以外に、こんな子がいたのか。

「わたしがこの学校 SSH指定校のK高に来た理由は、数学研究会に入って、もっと数学を学びたいからです。

1人だけ女子っていうのは、みんなも落ち着かないかもしれない

けど、仲良くしてください」

そこで再びぺこり。彼女が顔を上げたとき、目が合った。慌てて  
そらそうとしたけど遅い。まぶしいほどの笑顔が向けられる。

そうか。僕はようやく合点がいった。SSH スーパー・サイ  
エンス・ハイスクール。科学技術、理科、数学教育に重点を置いた  
カリキュラム開発を推進しているため、数学を深く学ぶ環境として  
は申し分ない。

しかし。僕はさらに考える。残念なことに、現在SS数学研究会  
の部員は僕1人だ。5人以上いたらしい3年生の先輩たちは、この  
春卒業してしまったから、僕は入れ替わりに数研に入ったことにな  
る。

「女子1人だけで、何かと困ることもあるだろうから、みんなで助  
けてあげてください。」

……あ、ちなみに数研の顧問は、私ですのよ」

「そうなんですか！ よろしくお願いします」

「前の彼も数研ですからね。色々と話を聞くといいですよ」

「数研仲間だね。よろしく」

あちゃあ。僕は頭を抱えなくなった。

森川先生も、とんだ爆弾を投げてくれたもんだ。

目の前には、杏里さんの綺麗な笑顔。

背中には、クラスメートたちの嫉妬と好奇の目。

……HR終了の、チャイムが鳴った。



(後書き)

ちよつと使いづらかつたので、他の投稿サイトで連載することになりました。

小説投稿サイト「アットノベルズ」にて、「数学」で検索していた  
だくとヒットします。

タイトルは「恋する数学者」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7281w/>

---

数学研究会

2011年9月17日03時19分発行